

仏の願い

平成23年 西雲寺だより 冬号(24号)



当山

御正忌報恩講の

ご案内

11月28日(月)～30日(水)

28日お逮夜(2時)

お初夜(7時) (武周お講)

29日お日中(10時)

大逮夜(2時) (御伝鈔)

お初夜(7時) (御伝鈔)

30日満日中(10時)

法話 福井 野世信水師

(29日より)

お誘い合わせの上
ご参詣下さいますよう
ご案内いたします

親鸞聖人のご生涯

晩年の親鸞

教行信証の完成

親鸞聖人は六十二、三歳の頃、京都に帰られました。それから七十三歳までその動静が全く伝えられておりません。実はその間、聖人は『教行信証』の完成にむけて全精力を傾けておられたのです。

親鸞聖人には、よき師法然上人に報いる大きな使命がありました。法然上人が『選択集（せんじやくしゅう）』を著し、浄土門を開いて専修（せんじゆ）念仏のみ教えをかかげると、比叡山や奈良の聖道門（しょうどうもん）仏教から激しい批判を受け、遂に承元（じょうげん）の法難がひき起され、吉水の教団は解散させられ、四人が死罪、八人が流罪となつたのです。よき師法然上人は七十六歳の高齡で土佐へ、親鸞聖人は越後へ流されました。聖人はこの法難に対して激しい憤りを感じるとともに、『選択集』に著された専修念仏の仏道こそ末法の世においてすべての者が救われていくまことの仏道であることを、世に顕らかにすることこそ、自分に課せられた使命であると『教行信証』の執筆にとりかかれたのです。既に越後流罪の頃より構想を練り、関東の稲田で執筆にとりかかれ、京都へ帰られて、たくさん経、論、釈にあたって、推敲、訂正を重ねて七十四歳頃一応完成し、お弟子の尊蓮に書写させました。その後、死の直前まで手元に置き、手を加えられたようです。こ

こに、よき師法然上人のご恩に報いるという大きな使命が達せられたのです。

『教行信証』は正しくは『顕浄土真実教行証文類（もんるい）』といわれ漢文で書かれた六巻から成る大部の書です。『教行証文類』となつていますが、如来から廻向された南無阿弥陀仏の行から信を開いて『信の巻』を顕わされましたので、『教行信証』と呼びならわされています。文類とは『大無量寿経』をはじめとする浄土の三部経、七高僧の論、釈、その他あらゆる経文から本願念仏の真実を顕わす文を集めて、そこに聖人の解釈を加えて構成されたものです。

これまでの自力聖道門の仏道と、親鸞聖人が明らかにされた他力浄土門の仏道との違いを見てみます。これまでの一般仏教の教えの構造は

教—教えを聞いて

信—その教えを信頼して

行—教えのとおり修行して

証—さとりや救いを得る

という「教、信、行、証」の順序になつています。これは仏教に限らず、キリスト教、創価学会、新興宗教などすべての宗教はこの順序になつています。

これに対して親鸞聖人が明らかにされた他力廻向の本願念仏の仏道は

教—『大無量寿経』に説かれる弥陀の本願

願

行—本願が具体的に南無阿弥陀仏という

行となつて私たち凡夫に廻向される

信—南無阿弥陀仏となつた如来の真実が

私に至り届いて信心となる

証—如来から賜わった信心が私たち凡夫

に救いのよるこびを与え、浄土への道を歩ませ無上涅槃のさとりを得せしめる

親鸞聖人が明らかにされた仏道は如来からの働きかけによる他力廻向の仏道であり、その中心となるのは信心です。信心が私たちを目覚めしめ、歩ましめるのです。

正信偈

私たち真宗門徒が、毎朝お内仏でおつとめするお正信偈は、『教行信証』の『行の巻』



正信偈 願寺藏
偈前文 東本願寺
(国宝)

の終わりに出ている六十行百二十句の漢詩です。正しくは『正信念仏偈』といい「正しい信心のうた」という意味です。正信偈には始めに偈前の文（げ

ぜんのもん）と呼ばれるものが置かれており、正信偈をあらわすお心を書いておられます。しかれば大聖（だいしょう）の真言に帰し、大祖の解釈（げしゃく）に閱して、仏恩（ぶつとん）の深遠（じんおん）なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰く

大聖の真言とはお釈迦さまのまことのことば、お念仏申してお浄土に生まれてくれというおことばです。大祖の解釈とは、七人の高僧の方々がそのお釈迦さまのまことのおしえをいただいて、論、釈として表して下さったことです。聖人はお釈迦さまの上に貫き、そして七高僧の上を貫いて、親鸞聖人の上の届いてきたまことの教え、『大無量寿経』に説かれた弥陀の本願に帰すこ

とのできた深い仏恩をよろこばれたのです。そして正信偈を作って曰く、

帰命無量寿如来 南無不可思議光

(私たちの迷いのいのちを撰取してやまない、はかりなき大悲のいのちの如来さまに帰命し、私たち凡夫の無明の闇をどこまでも破って下さる如来さまに南無します。すなわちこの私のいのちをゆだねさせていただきます。)

と、正信偈が始まっています。

正信偈は大きく分けて二つの部分からなっています。「帰命無量寿如来」から「難中之難無過斯」までの前半と、「印度西天之論家」から「唯可信斯高僧説」までの後半部分です。前半は阿弥陀如来の本願を説く『大無量寿経』の教えが簡潔にまとめられ、後半は七高僧の徳とその教えを讃える内容となっています。

親鸞聖人と七高僧

法然上人は「遍依（へんゑ）善導一師」といわれ、お釈迦さまの本願のおしえを受け伝えた善導大師のおしえによって、浄土宗を開かれました。特に善導大師は『観無量寿経』の教えを大切にされ、当時中国で『観無量寿経』に対していろんな解釈がなされていたなかで、善導大師だけがお釈迦さまの真意を明らかにされたという意味で正信偈には「善導独明仏正意」と述べられ、おつとめの際にはその前で切り「善導独明仏正意」と調声（ちょうしょう）することになっています。

これに対して親鸞聖人が顕らかにされた七高僧とは、お釈迦さまの本願念仏のおし

えを私にまで伝えて下さったインドの龍樹菩薩と天親菩薩、そして中国の曇鸞大師と道綽禪師、そして善導大師、日本にきて源信僧都と法然上人の七人の高僧方です。

この七人の高僧方は親鸞聖人が弥陀の本願に出遇ったところから見い出された方々です。聖人が本願に出遇ったところに歴史が開いたのです。親鸞聖人まで本願のまことが届いてくださった深い深い仏縁が見い出されてきたのです。

和讃の製作

親鸞聖人は『教行信証』を完成させると、休む間もなく和讃の製作にとりかかられました。和讃とは仮名まじり文で作られた讃歌のこと

で、七五調による四行を基本形として作られたものです。『教行信証』は漢文で書かれたもので内容もむずかしく一般の民衆に理解できるものでありません。そこで聖人は『教行信証』に顕らかにされた教えの内容を、一般庶民にも理解し口ずさむことのできる当時流行した今様（いまよう）の歌の形にして表そうとなされたのです。そして七十五から七十六歳の二年間で『浄土和讃』百十八首、『高僧和讃』百十九首を完成させたのです。

まさに驚異的といわなければなりません。聖人なき後、正信偈、念仏、和讃というおつとめの形が整えられ、私たちはいつでも

本願念仏のみ教えに親しむことができるのです。和讃には三つの種類があり、三帖（さんじょう）和讃と呼ばれています。

浄土和讃

曇鸞大師の『讃阿弥陀佛偈』や『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』等の經典の要点をわかりやすく詠まれ、浄土の徳を讃嘆されたものです。私たちは毎朝のおつとめにこの浄土和讃の始めの「弥陀成仏のかたはく」以下六首をあげさせていた



宗祖真跡 三帖和讃
(国宝・高田専修寺蔵)

高僧和讃

インドの龍樹と天親、中国の曇鸞、道綽、善導、日本の源信と法然の七人の七高僧のみ教えとのお徳を讃嘆されたものです。

正像末

（しょうざうまつ）和讃、本願念仏のみ教えは、正法、像法、末法の三時を貫いて一切の人々に信心の救いとよる。こびを与え続けてきたことを讃嘆したもので、最後は誰にでも知られている「如来大悲の恩徳はく」で結ばれています。この正像末和讃は、親鸞聖人八十四歳のとき、異安心のかどで長男善鸞さまを義絶した悲嘆のどん底から如来の励ましを受けて八十五歳のとき作られたもので、九十一首からなっています。（住職）

寄稿

継承・バトンタッチ

本堂町 八木健二

今年には私にとって、大きな出来事がありました。

農業一筋に頑張ってきた父親が四月に亡くなりました。父親が仏法の教えに少しでも近づこうと、お寺さんや我が家の仏壇にお参りしていた姿を思い出します。病院での最後の言葉は「後を頼むな」の言葉でした。その言葉には、色々な意味合いが含まれていると思います。私も心の寄り所として、毎月二十七日に開催される本堂町武周同行のお講様や、西雲寺の永代経、報恩講等の参拝を通じて、父親の思いを継承していきたいと思っております。

また、五月にはご縁があつて、親鸞聖人七五〇回大遠忌に夫婦そろって参拝することが出来ました。厳かな雰囲気の中、大法要が執り行われ、仏法の教えを頂き、感慨深く参拝させて頂きました。親鸞聖人の教えがこれだけ永く語られ継承されていることは、それぞれの時代や現代においても、その教えが私達に相通じるものがあると思えました。

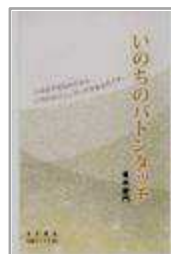
このような大きな出来事を契機として、伝統ある立派な西雲寺の門徒を誇りに、世の中移り変わっても仏法の真髄は次世代へバトンタッチしていきたいと思っております。

私も長年の勤めから解放されるので、今後は、仏法の教えを頂き、教えを少しづつ解き明かしながら「お蔭様と感謝の気持ち忘れず」に「晴耕雨読の心境で農林業に頑張っていきたいと思っております。

図書紹介

『いのちのバトンタッチ』

青木新門著



東本願寺出版部

2007年

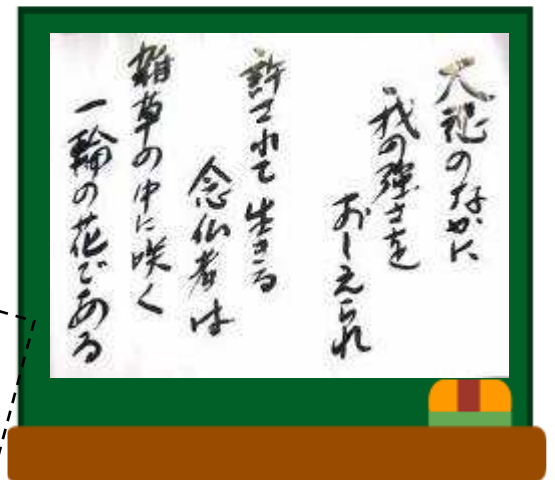
税込250円

2008年のアカデミー賞に選ばれた映画『おくりびと』は、主演の本木雅弘さんが青木新門さんの『納棺夫日記』に感動したことが土台になっっているそうです。

青木さんの講演録であるこの本には、「蛆（うじ）を掃き集めているうちに、一匹一匹の蛆が光って見え始めた。」「最後にどうしても忘れられないことがあります。それはおじいちゃんの顔です。遺体の笑顔です。とてもおらかな笑顔でした。」というような驚きの言葉があります。青木さんも靈魂の有無に迷ってはいけないと書いている通り、決してオカルト的な意味じゃなく、同じものなのにもまるで違って見える！という感動だと思えます。

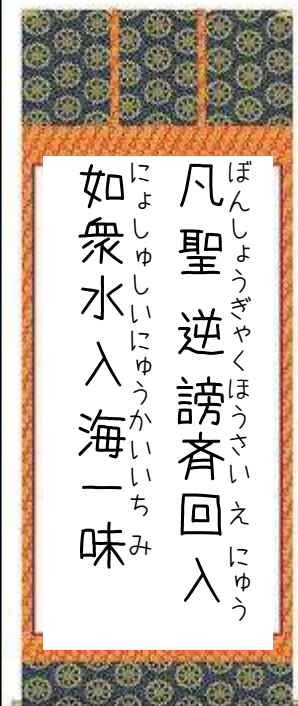
いのちの私有化を悲しみ、死の現場を大事にするこの小冊子をぜひどうぞ。インターネットでのご注文が便利です。お寺にもありますよ。

山門掲示板



ぐちをいわずにおられない人生
 人をほめること少く、
 悪口をいわずにおられない根性のあさましき。
 財欲、色欲、飲食欲、名誉欲、睡眠欲と
 この五欲の全てをせおうて、
 とぼとぼと歩み
 あるときは激しく燃えゆく、
 この雑草の如き欲の中にも、美しき花が咲く。
 如来の大悲は、
 ありべのままの私を静かに抱いて
 合掌せずにおられない人生を
 知らして下さる
 煩惱深きが故に、如来の大悲あり
 煩惱あるがまま、仏智に転じられ、
 ご恩、ご恩と花を咲かせて下さる。
 まことに仏智は不思議である。(住職)

『正信偈』に先輩の感動あり



読み方

凡^{ぼん}聖^{しやう}逆^{ぎやく}謗^{ぼう}齊^{ひと}しく回^え入^{にゆう}すれば
 衆^{しゆすい}水^{うみ}海^いに入りて一^{いち}味^みなるが如^{ごと}し

意味

凡夫も聖者も罪人も無関心者も、
 仏の願いに目覚める(回入する)な
 らば、どんな川の水も海に入ると
 一つの味になるように、齊しく救
 われるのです。



- ★「ウラも同じ納骨堂へ入らせてもらう」って
お年寄りがゆうてたのと同じことかな？
- ★「仏の願いに目覚めるならば」っていうのが
今ひとつよく分からんよ

報恩講の屋台骨



お寺じゅうを大掃除



台所は早朝5時ごろから



にぎやかにズイキの皮むき



ひなかかけておみがき



おかざりもち作り



外回りの草刈り



菊の搬入



ハチの巣落とし



落ち葉掃き



会所のみなさん

発行

真宗仏光寺派 専念山 **西雲寺**
 住職 護城一寿
 筆頭総代 吉川芳弘
 編集責任者 護城一哉
 〒910-3523 福井市武周町5-2
 電話 0776-97-2138
 メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
 ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！
 お手元に2部届いた時には、ぜひ
 ご活用下さい。

みなさんの声 大募集！
 原稿や作品はもちろん、ご意見、
 ご感想など、どしどしお寄せ下さい。
 郵送でもメールでも構いません。お
 待ちしております。